# アイヌ語

木原（きはら） 仁美（ひとみ）（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構職員）

## 1.アイヌの人口について

平成18年度(2006)　北海道環境生活部による北海道アイヌ生活実態調査に協力によると、北海道には 23、782人のアイヌが居住しているとされています。しかし、この数字は北海道のみで、全国のアイヌを調査したことはありません。また、この数字はアイヌだと自ら認めている人の人数で、アイヌである事を差別を理由に隠している人も少なからずいます。首都圏に住むアイヌの数も平成元年（1989）東京都の調査で都内に住むアイヌが約2,700人とされている以外の数字はありません。

## 2.財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構とアイヌ文化交流センターについて

1997年5月に「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及および啓発に関する法律」が制定され、この法律に基づき全国唯一の法人として指定を受け同年7月に財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（以下財団）が発足しました。

アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現と国民文化の一層の発展に資することを基本理念に2008年度は5つの柱に基づく事業を実施しています。

1. アイヌに関する総合的かつ実践的な研究の推進
2. アイヌ語の振興
3. アイヌ文化の振興
4. アイヌの伝統等に関する普及啓発
5. 伝統的生活空間の再生

財団の1事業として東京都中央区八重洲にアイヌ文化交流センターが設置されています。首都圏に居住するアイヌの人々の交流活動の場として、また一般の人々がアイヌ文化に関する情報収集・発信の場として利用されています。
詳しく知りたい方はホームページ http://frpac.or.jp/ にアクセスしてください。

## 3.アイヌ語の話者とアイヌ語復興について

明治政府の同化政策によって、日本語を話さなくては生活できない環境が作り上げられました。ですから今アイヌ語だけを話して暮らしている人はいません。

アイヌ語を母語として育った方でご存命の人が何人いるのか私は知りません。おそらく80歳代以上で祖父母に育てられた等よほどアイヌ語を伝承するにおいて恵まれた生活環境で育った人だと思います。

しかし、アイヌ語を身につけようと学習している人は増えています。財団の事業のなかでも右表のようにアイヌ語の振興に関するものがあります。

アイヌ文化交流センターでは、中川裕千葉大学教授が講師で上級講座を毎月1回開講しています。受講生は20代～60代までの12名で、全員アイヌです。受講生の孫で小学生も2人一緒に聴講しこの他に北海道では、財団の事業とは別に（社）北海道ウタリ協会が14地区でアイヌ語教室を開設しています。

■ 財団のアイヌ語振興

| |
|---|
| 1.アイヌ語教育事業 |
| ● 指導者育成事業 |
| ● 上級講座 |
| ● 親と子のアイヌ語学習 |
| ● アイヌ語教育整備事業 |
| 2.アイヌ語普及事業 |
| ● ラジオ講座 |
| STVラジオから放送。 |
| 放送内容はインターネットでも配信 |
| ◇本放送　毎週日曜日　あさ　　7:05～7 :20 |
| ◇再放送　毎週土曜日　よる 11:15～11:30 |
| STVホームページ |
| http://www.stv.ne.jp/radio/ainugo/index.html |
| ● 弁論大会 |

## 4.私自身のアイヌ語を学んだ状況

・1989年～1996年頃まで関東ウタリ会主催「母と子のアイヌ語教室」で月1回受講
・ 1993年～1995年　千葉大学のアイヌ語の授業を聴講

## 5.アイヌ語に未来はあるか

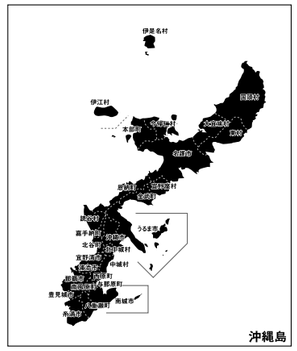
・ アイヌ語弁論大会
・ 指導者育成事業での若手の活躍
・ AINU REBELSの活動

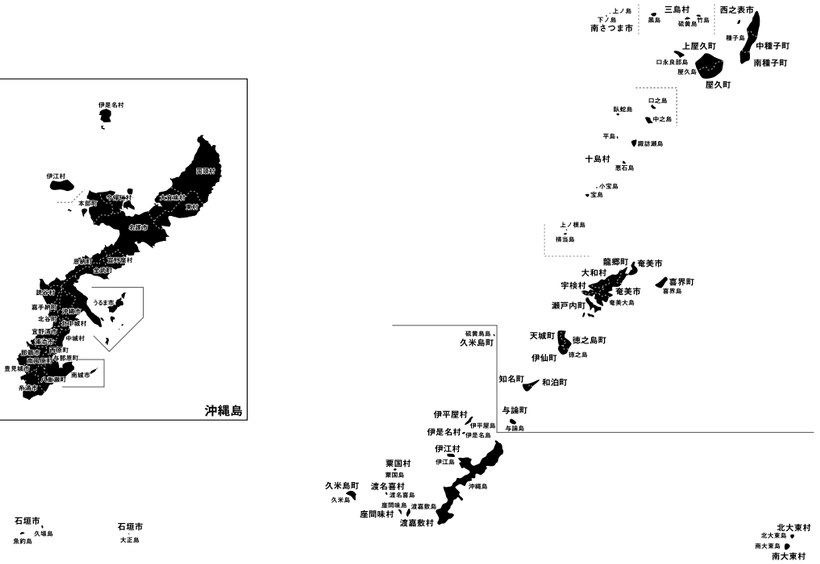


# 琉球語について

下地（しもじ） 賀代子（かよこ）（千葉大学非常勤講師）

## 1.「琉球弧」



※沖縄県推計人口:1,376,926人
(2008.9.1現在 「沖縄県統計資料webサイト」http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/)
[内訳・・・沖縄1,270,776人,宮古53,619人,八重山52,531人]
※奄美諸島推計人口:121,166人
(2008.10.1現在.「鹿児島県HP・統計情報」http://www.pref.kagoshima.jp/tokei/index.html)

## 2. 琉球の諸言語(諸方言)

北琉球
- 奄美
  - 北奄美―奄美大島北部、奄美大島南部、徳之島、喜界島北部
  - 南奄美―喜界島南部、沖永良部島、与論島
- 沖縄
  - 北沖縄―沖縄本島北部、伊江島,津堅島、久高島
  - 南沖縄―沖縄本島中南部、久米島、慶良間諸島、粟国島、伊平屋島、伊是名島
- 宮古―宮古島、来間島、大神島、池間島、伊良部島、多良間島

南琉球
- 八重山―石垣島、竹富島、新城島、小浜島、西表島、波照間島、黒島、鳩間島
- 与那国―与那国島

(中本正智1981『日本語の原景』より)

島ごとの違いがとても大きく、特に久米島と宮古諸島の間の海域を境に,文化的にも言語的にも大きな違いがある。また、沖縄本島付近の言語(方言)はまだまとまりは強いほうだが、先島の言語(方言)は各地で大きく異なっている。それは、意思の疎通に困難を生じさせることもあるほどである。

## 3. 地域差 ―首里(沖縄)と多良間島(宮古)

まず、音声の体系が異なっている。姉妹語である日本語の母音「ア・イ・ウ・エ・オ」との対応関係で見ると、首里では「ア・イ・ウ・イ・ウ」となるのに対し、多良間島では「ア・イ[※1]・ウ・イ・ウ」となる。子音に関しても相手の言語にはない音をそれぞれ持っている(<例>「沖縄」ウチナー(首里／ウキィナー(多良間)、「お前」ッヤー[※2](首里)、「鶏」トゥ゚ゥ[※3](多良間))。また文法や語彙についても、例えば動詞はその基本の形から異なっており(<例>「書く」カチュン(首里)／カキィ゚(多良間))、形の面でも語法の面でもその違いは大きい。

※1 「中舌母音」、「舌先母音」などと呼ばれる母音。[ɨ]、[ɨ̞]、[ï]などの記号で表される ※2 喉に引っかけるように発音される子音。[ʔ]の記号で表される
※3 舌先を反らせ、母音を伴わないで発音される音。宮古でも多良間と伊良部にしかない

## 4. 話者の現状

地域によって細かな状況は異なるが、全体的な傾向として話者は著しく減少している。2006年に琉球新報社によって実施された「沖縄県民意識調査」[※4]によると、琉球語を「話せない」人は全体の47.2%に達しており、特に20代では約9割の人が「話せない」という結果が出ている。では、若い人は日本語(共通語)を使っているのかと言うとそのようなわけでもなく、一般に「ウチナーヤマトゥグチ」と呼ばれる「新しい　方言」が、日常言語として用いられている。ウチナーヤマトゥグチは地域差が小さく、他島の人同士であっても意思疎通に困ることはまずない。　また、音声、語彙、文法のいずれの点においても、各地の琉球語よりも日本語(共通語)の方により近いものとなっている。そのためか、両者の　若干の差異、特にイントネーションの違いなどは意識されていないことが多い。

このような状況への憂いと焦りからか、琉球語の「継承」に関する取り組みは、近年さらに盛んになってきている。2006年の「しまくとぅばの日」の制定はその顕著な表れであろう。地域レベルでも、弁論大会や「方言講座」の開催など、様々な取り組みがなされている。

※4 沖縄県内20歳以上の男女を対象に実施。2,014人。層化2段階無作為抽出法により対象者を選出。調査員が直接面接し質問書に沿って回答、コンピューターで処理。有効回答者は1,064人。
(琉球新報社「2006沖縄県民意識調査報告書」より)